

米国病院船マーシー東京寄港に係る企画検討会（第2回）

議事要旨

1 日時等

日時：平成29年12月19日（火）16:00～17:30

場所：中央合同庁舎第8号館3階 災害対策本部会議室

2 出席者

跡見委員（座長）、小井土委員、砂田委員、山口委員、吉井委員、行政委員（内閣官房（内政）三浦委員、内閣官房（事態対処・危機管理担当）岩下委員（代理 塚参事官補佐）、内閣府（防災）須藤委員、消防庁 野本委員（代理 石井救急推進係長）、消防庁 本間委員（代理 明田課長補佐）、外務省 有吉委員（代理 馬場首席事務官）、厚生労働省 徳本委員（代理 小谷専門官）、国土交通省 吉田委員（代理 星川課長補佐）、海上保安庁 金子委員、防衛省 矢田委員、防衛省 得津委員（代理 堀越班員）、防衛省 山口委員（代理 渡辺班長）、東京都 小澤委員、東京都 清武委員、東京消防庁 山本委員）

3 議事要旨

（1）事務局から、「米国病院船マーシー寄港時における企画案」及び「本日の論点」について説明が行われた。

委員からの主な意見は以下のとおり。

- セミナーの一班20人とあるが、医療関係者は、「病院船の機能」の班のように実際の処置を見ることができるテーマに興味があるため、この班を30人程度にして、残りを15人ずつとするなど、融通を持って考えてよいか。
- 全体としては、60人程度が、行動するには好ましいかもしれない。
- 小型艇を使った搬送をなくし、ヘリによる搬送の想定をしたとのことだが、そちらの方が実践的であると考えます。
- 症例として、多発性外傷と熱傷患者というのは、首都直下地震では都内だけでは対応できないものであるため、シナリオとしてはよろしいのではないかと考える。
- トリアージスペースを使った患者の処置概要とそこからの流れというのは見た方がよいと思うので、複数名の搬送も提案として挙げさせてもらいたい。ただし、自衛隊のヘリをどういったヘリを使うかによる。
- 多発性外傷と熱傷は基本的には初動での対処が随分と異なっている。実際に、

マーシーはやけどにも強い病院船と聞いているので、どのようにやるのか非常に興味がある。

- 災害拠点病院からの搬送というのは、羽田からするのか、拠点病院からするのか、おおまかに決めておかなければならないと思う。
- 訓練としては、必ずしも、実際の病院でなくても、羽田に仮想の拠点病院を設置して、そちらからの搬送で流れの中で確認はできると考える。
- いずれのヘリポートを有している災害拠点病院も、実際の救急搬送で運用するので、近隣への騒音問題も考慮すると、羽田空港に仮想として災害拠点病院を作った方がよろしいと思う。
- NBCの患者はどこで発生したか、大災害が起こったときに爆発で患者が出たという想定なのかなど、NBC災害の想定が曖昧。
- マーシーの中の病院機能的なものとしての処置を見るというところに主眼があるので、運び込むまでの想定はあまり必要ないのではないか。
- 首都直下型地震に対応してNBCに関してもなんらかのシチュエーションがあった方がいいのではないか。患者がどういう想定で来たかをイメージできるものを加えたらどうか。
- NBC患者のいずれにするかは1月に米側と相談していただいて、決定したい。
- 事前にマーシーへの着艦訓練について、米側と調整をしていただきたいと思うので、よろしく願います。
- セミナー・ディスカッションの時間は80分あれば十分だと思う。ただし、既に書かれているが、事前にディスカッションポイントは決めておく必要がある。
- 最終的には報告書の形に取りまとめたく考えているので、80分だけで作業が終わるとは考えていない。できるだけ、その前にも、各班検討していただいて、あらかじめ、予備勉強をしたうえで、臨んでいただけたらと考えている。
- 災害時の運用方法については特に重要と思う。災害全体の指揮系統は、どこかに本部がおかれるはずなので、そういうところとどういう連携をとって、病院船を中心として救急災害医療を行っているのか興味がある。資料にあるように、災害医療関係者や行政の関係者も加わっていただいて、マーシーの持つ機能を把握する必要はあると思う。平時の運用方法も、実際問題として、平時の方が時間が長いので、どう有意義に使うかは重要だと思う。
- シンポジウムの基調講演では、米側がこれまでのパシフィックパートナーシップで培ってきた経験から、私たちは何を学び、何を実践することが望ましいか、将来については、我々はこう考えている、というのを、経験を交えた話を基調として講演していただくとありがたい。

(2) 事務局から、「今後の企画検討会」について説明が行われた。

委員からの主な意見は以下のとおり。

- 災害時の活用班には、船のことをよく知っている人がこれに加えて必要だと思う。船のスペック、実際には災害のときに入っていくときの喫水の要件だとか、通信とか、船の専門家が加えて必要かと思う。
- 班長の負担が大きいため、副班長的な人を入れるのがいいと思う。
- 平時の活用班の構成について、文部科学省が所管している J A M S T E C の船舶のいわゆる運営維持、操舵関係者とか船員とかが民間に委託されているので、J A M S T E C のノウハウをお聞かせできるような場があると今後の参考になるのではないか。
- J A M S T E C の方に、参加者として入ってもらいか、勉強会の時に講師として来てもらうか、いろいろな方法が考えられるが、これも候補として考えていきたいと思う。一班15人から20人でかなりの人にご参加いただけると思うので、各省庁の方々からもご推薦いただいて、事務局の方でまとめていただいて、人数などを決めていきたいと思う。勉強会は2回でよいかと思う。
- 勉強会の基礎資料には、病院船ではなく通常の艦船を病院船に使う時の課題の抽出等をしているので、その時の結果等をここに反映できればと思う。
- 医療の提供体制については、重要だと思う。マーシーが軍の立場で任務をしているときは非常にシンプルなのだが、国内災害でマーシーを使う場合には、かなり複雑な指揮系統であった。軍の立場でなくて、国内災害にどのように関わるのか、この点、参考になると思う。

(3) 事務局から以下のとおり事務連絡を行った。

次回企画検討会は、F P C の報告とセミナーの構成を中心として行う。

開催は1月下旬を予定しているが、改めて調整し、連絡する。

以 上